

朝日 vs.産経ではなく朝日 vs.「吉田調書」の図式で朝日は崩れた

8. 18産経は三面でまた、《朝日新聞のホームページでは吉田調書の要約版を日本語と英語で公開(会員登録が必要)している》ことや、次のような朝日新聞社広報部のコメントを掲載している。「吉田氏が命じたのは、高線量の場所から一時退避し、すぐに現場に戻れる第1原発構内での待機だったことは、記事で示した通りです。10キロ離れた第2原発への撤退は命令に違反した行為です。一部週刊誌の『虚報』『ウソ』などの報道は、朝日新聞社の名誉と信用を著しく毀損(きそん)しています。嚴重に抗議するとともに、訂正と謝罪の記事の掲載を求めています」

吉田昌郎所長が現場の作業員について、どのように見ていたか、もテレビ欄の前の面で「危険顧みず職務『感動』」の大見出しで伝えている。

《「吉田調書」では、吉田昌郎所長(…)が、現場の作業員について「日本有数の技術屋」「(危険な)現場に(自ら率先して)行こうとすることに本当に感動した」と、高く評価する言葉を述べていた。調書からは「フクシマ・フィフティーズ(福島の50人)」と世界が称賛した勇敢な姿だけでなく、現場の作業員の有事での工夫と判断力で事故の被害を最小限に抑えられたことが浮かび上がる。

23年3月11日に全交流電源喪失後、2号機では原子炉隔離時冷却系(RCIC)が動いているか確認できない状況が続いていた。12日午前2時55分にRCICの運転を確認したが、バッテリーが8時間しか持たないことから、電源の選別が迫られた。

この時の状況について、吉田氏は「不要な負荷を全部切ったのは現場の判断。私がそこまで言っていない。私はそこまで分からないというか、逆によくやってくれたなと思っている」と語り、現場が瞬時に状況判断したことを評価した。

また、バッテリーが足りない時には「うちの連中は、車のバッテリーを外したり、ものすごい知恵を働かせてやれることを全部やった」とも語った。

さらに、事故直後に専門技能を持つ協力企業もない中で、ケーブルや給水ラインの調達、接続ができたことについても言及。「口幅ったいようだが、ここの発電所の発電員、補修員は優秀だ。今までトラブルも経験し、肌身で作業してきた経験があるから、これだけのことができたと思う」と評価した。

その上で、「私が指揮官として合格だったかどうか、私は全然できませんけども、部下たちはそういう意味では、日本で有数の手が動く技術屋だった」と絶賛した。

3号機爆発直後は、高線量のがれき撤去や注水のためのホース交換をしなければならず、作業員を危険な現場に送り出さざるを得なかった。吉田氏は「注水の準備に即応してくれと、頭を下げて頼んだ。本当に感動したのは、みんな現場に行こうとするわけです」と、危険を顧みずに職務を全うしようとする姿をたたえた。》

朝日 vs. 産経の図式にみえるが、そうではない。図式にするなら、朝日 vs. 「吉田調書」になるだろう。産経は朝日のように恣意的な引用にとどめずに、抄録や要約であろうとも、ただ単にできるだけ吉田所長の声を紙面を通じて伝えようとしていたのに、朝日は「吉田調書」を通じて自分たちの見解—主張を広めようとしていただけであるからだ。それは、「作業員の職場離脱」「所長命令に違反」という見解を一貫して打ち出しながら、「全員撤退して身を引くということは言っていないよ。私は残りますし、当然操作する人間は残すけども、関係ない人間はさせますからとっただけです」とか、「逃げていないではないか、逃げたんだったら言え」と、吉田所長がうんざりしながら声を荒げている発言を無視しているところに紛れもなくみられる。

要するに、産経は吉田所長はこう言っているのではないかと示しているだけであり、それに対して朝日は吉田所長がどのように言おうとも、自分たちは「作業員の職務違反」とみなすという主張を押し通そうとしているのだ。つまり、当の吉田所長が「作業員の職務違反」ではないと表明しているのに、いや我々からすれば、それは立派な「職務違反」に当たるんですよ、と実に不可思議で滑稽なことを、朝日は主張していることになるのである。そんな朝日の奇妙な見解が、産経の入手した「吉田調書」

が公開されると、通らなくなるのは当然のことであった。

それでも朝日は先に瓦版に転載した門田隆将の産経への寄稿文に対して、「確かな取材に基づいており、事実をねじ曲げていない」と抗議文を送るなど、「強気の姿勢を崩さなかった」と書く『週刊文春』(14.9.11)は、こう続ける。

《しかし、8月29日には、読売新聞も同調書入手。産経同様、朝日の報道を明確に否定したのだ。

さらなる決定打が出たのは、その翌日だった。共同通信が産経、読売に続いて、吉田調書の内容を配信。毎日新聞も共同通信の配信に基づいて一面で掲載。いずれも朝日の報道を否定した。朝日と比較的社論が近い毎日、共同までが敵に回った。ここにおいて、マスコミの朝日包囲網が完全に出来上がった感がある。別の朝日中堅記者も認める。

「他紙の報道をみると、ウチが『撤退、命令違反』と書いたのはミスリードだった。誤報と指摘されても仕方ありません。元々、朝日と対立する立場を取る多くの産経、読売からの批判はまだしも、まさか毎日までが参戦するとは想定外でした。慰安婦問題でも毎日は、朝日の検証記事第二弾が出た際に、『朝日は96年のクマラスワミ報告に吉田証言が証拠として言及されていることに触れていない』と追及しています」

毎日の記者が語る。

「今も昔も朝日の特徴は、オレたちがニュースを作り出しているという自意識過剰な部分です。そうした記者の驕りが吉田調書問題でも如実に現れていると思います。あの報道には、さすがにうちもついていけません」

そして、政府が9月11日に「吉田調書」を公開することになって、万事休すと観念したのか、同日に朝日社長の記者会見が行われることになるのである。『週刊文春』同号にはまた、「慰安婦報道検証記事」の余波で揺れる朝日の木村伊量社長(60)が8月28日に全社員向けに綴った次のメールも「スクープ」されている。以下の文章は朝日新聞社内専用ホームページ「風月動天」に、ひと月に一度アップされており、「同ページは朝日新聞社外の人間には閲覧不可能。また他メディアに内容が漏れないよう、「閲覧する際には、個々人のパスワードを打ち込まなければならず、誰が印刷したかまで、会社側が把握できる」(現役社員)という。》

〈長年にわたる朝日新聞ファンの読者や企業、官僚、メディア各社のトップ、ASA幹部の皆さんなど多くの方から「今回の記事は朝日新聞への信頼をさらに高めた」「理不尽な圧力に絶対に負けるな。とことん応援します」といった激励をいただいています〉

〈「慰安婦問題を世界に広げた諸悪の根源は朝日新聞」といった誤った情報をまき散らし、反朝日キャンペーンを繰り広げる勢力に断じて屈するわけにはいきません〉

〈「吉田調書」について〉朝日新聞が書かなければ永久に世の中に知られることがなかったかもしれない衝撃の事実の連打で、これぞ価値ある第一級のスクープ〉と自賛。

また、『週刊ポスト』(14.9.19-26)にも同メールが「スクープ」されているので、追加しておく。

〈新聞、雑誌やネット上で「慰安婦問題は朝日新聞が捏造報道したことがそもそもの始まり」といった、いわれのない非難、中傷が続いていました〉

〈「朝日がついに誤報を認めた」と鬼の首を取ったかのようなネガティブキャンペーンが始まっています〉

〈一部の朝日攻撃はしばらく続くと見ておくべきでしょう〉

〈検証記事についても〉特別編成された取材班の皆さんの誠実で、ファクトに徹底してこだわる緻密な検証作業なくして、今回の紙面展開は成り立ちませんでした。ほんとうにご苦労様でした〉と称賛。

さて9月11日の朝日社長の記者会見が行われ、その二日後の9月13日の朝日社説に目を通してると、またもや信じられない言葉遣いが見出された。《誤報だった記事に基づいて「所員の9割が命令に反して10%余り離れた別の原発に一時退避」や「所長の指示・命令が守られず」という表現を使いました。社説を担う論説委員室として、読者や関係者の方々にかさねて深くおわびします。》と書かれている箇所に問題が集中しているのである。二つの問題を指摘しなければならないが、紙面の都合で次号でその諸点について展開する。